八重山石垣のアンガマ報告

草山　洋平

2003年８月に石垣島の盆行事であるアンガマを見てきた。このアンガマはソーロン・アンガマと呼ばれ、他の三十三年忌（フーシユーコー）アンガマや節（シチ）アンガマなどと区別される。ソーロンとは旧盆のことで、恐らく本土のショーローやショーロンと同義であると思われる。その名の通り旧暦のお盆、７月13日、14日、15日に行われる。これが今年のカレンダー上では８月10日、11日、12日にあたる。（以降の日付けは全て新暦のものとする。）このソーロンの日をそれぞれウンカイ（お迎え）、ナカヌビー（中の日）、ウウクリ（お送り）という。ウンカイで先祖を個々の家にお迎えして、ナカヌビーで共にゆっくり過ごす。ウウクリでお土産を持たせて帰ってもらうとされているようである。

アンガマには二系統あるようだ。八重山の芸能や行事に詳しい波照間永吉の『南島祭祀歌謡の研究』によれば、ひとつは八重山の治者階級であった石垣島四ッ字の士族で行なわれていたもの、もう１つは、その他の離島や農村部落で行なわれていたものである。今回、ソーロンの三日間で見たアンガマは前者のほうであり、これには翁と媼の仮面を付けた者が、見物人と問答をしながら後生について教訓も織り交ぜながら、おもしろおかしく説いていくというものである。

アンガマは一日に数軒の家々を訪れるものである。いつ、どの家を訪れるかは前日頃に新聞で発表される。９日の八重山毎日新聞の朝刊には、各地区ごとの開始される予定時刻とアンガマが訪れる順に家の住所が書かれていた。それを見る限り、現在アンガマは６つの青年会がそれぞれの地域で所望された家々をまわって行なっているようである。つまり、三日間多少の時間差はあるものの石垣四ッ字のあちこちで、６つの青年会がほぼ同時にアンガマを行なっているのである。

さて、先にも述べたようにアンガマは石垣市内の全ての家々を訪れるのではない。ではどのような家を訪れるのかというと、基本的には初盆の家で呼ぶのだそうだ。ただし、近年では初盆以外の家でも毎年の恒例のように呼ぶ家もある。手順としては、青年会にアンガマを所望する。（この時、今年はどうしますか？という青年会側からの声がかかる場合もある。）それにより、青年会がコースを組んで訪れるという形式が基本である。また、一度アンガマを呼ぶ費用は一万円だそうだ。これは、数年前にアンガマを呼んだという家の方からうかがった話であるが、恐らくどこの青年会もこのくらいであろうということであった。

９日

９日の夕方、何気なく町中を歩いているとサトウキビを数本に切り分けている老人を見かけた。もしかしたら盆の準備をしているのかもしれないと思い、声をかけてみると、これは盆飾りの１つで仏壇に供えるものだという。30センチくらいに切った７本のサトウキ

ビを束ねたものを２つ。これが先にあげたお土産の１つであり、祖先はこれを持って、後生に戻る途中で無縁仏などにこれを配ってやりながら帰るのだそうだ。さらにその隣りに90センチくらいの長いサトウキビを立てかけて飾る。これも供え物のひとつで、祖先が後生に帰る時、杖のかわりにするのだそうだ。

そんな話を聞きいていたら、翌日の夕方には盆の準備も済んでいるだろうから、その頃にまた来なさいと誘われた。勿論、有難くお受けした。

10日

アンガマは夜に行なわれる。従って10日も昼間のうちは町の人々は日常の生活をしているように見えた。アンガマを見に行く前に前日サトウキビを切っていた方のお宅を伺った。訪れてすぐにお膳がでてきた。出来上がったばかりの仏前に供える料理と同じものであるという。内容はジューシー（まぜ御飯）、海老の天ぷら、インゲンとかまぼこのかき揚げ、ラフテー（豚の角煮）、ソーセージ、かまぼこであった。〈写真１〉どれも日常でも食べられているものである。仏壇は本州のものと

写真１　海人のお宅でいただいた御飯

は違い大きく、華やかであった。左右に回転燈篭があり、仏前に台が置かれ供え物が並べられていた。最上段にある戒名の横にはパイナップルが置かれ、その隣りに高杯に乗せられた昨日のサトウキビの束があった。これはこの家に限ったものではなく、この後アンガマの為に訪れた家々にもたいてい供えられていた。先祖が杖にされるというサトウキビは更にその隣り、仏壇の両壁面に斜めに立てかけられていた。〈写真２〉このお宅は海人（ウミンチュ）（漁師）の家であったが、一般家庭でもこれくらいは飾り、アンガマを呼ぶ家の仏壇はもっと豪華だと教えてくれた。

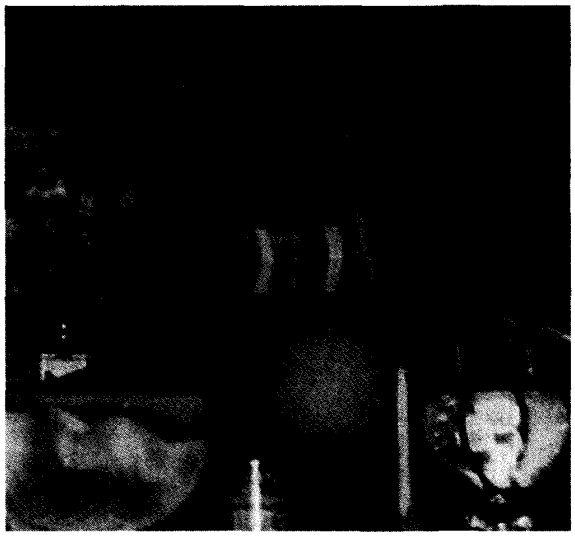

写真２　仏壇に供えられた、お土産と杖のさとうきび

さて、目的のアンガマである。10日、登野城青年会の１軒目を見てから石垣青年会に付いてまわった。一軒目のお宅に行く途中、登野城のアンガマの出発点である公民館に寄ったのだが、中に人が居る様子はなく、ひっそりと静まりかえていた。15分程待ってみたが変化はなくそのまま１軒目へ向かった。

18時20分、通りの角より三線の音が聞こえてきた。アンガマの登場である。翁と媼を先頭にしてファーマーと呼ばれる翁と媼の子孫が続き、二列に並んで歩いてきた。外はまだ明るく、空もまだ青い。とても夕方とは思え

ない風景である。見物人は少なく、私以外には地方紙の記者とアンガマの衣装を見にきたという学生数名だけであった。アンガマは三線にのせて道行き歌を歌いながら家に近づいて来る。そのまま20名を越える一団が家の中へ入っていった。全員が座るのを待ってから焼香をし、ウシュマイ（翁）とンミー（媼）が独特の裏声で仏壇に向い、霊前口上を唱えた。〈写真３〉先の海人の家の仏壇よりも更に大きく、箪笥一竿くらいあり、やはり左右は燈篭で飾られ、たくさんの供え物があった。

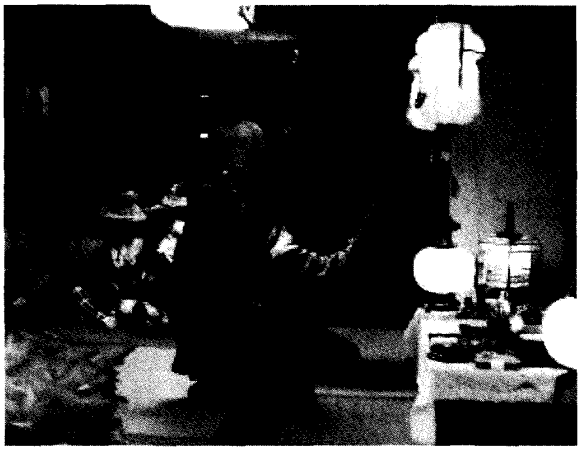

写真３　仏壇に手を合わせ、口上する翁と媼

口上は仏壇にたくさんのものが供えられている事を褒め、この家のお婆さんが青年会に踊りを教えていることを報告し、あなたたちの子孫は実によく出来た者たちであると褒める内容であった。

18時27分、口上を終えミンブチャー（念仏）の踊りにはいった。ファーマーの歌に合わせて翁と媼が両腕を広げてゆったりと舞う。〈写真４〉歌詞は、親の恩は山よりも高く、海よりも深いという意味だ。ミンブチャーが終わるとファーマーたちが出てきて八重山の様々な節歌で踊る。その踊りと踊りの合間に問答が行なわれるのである。ここでの問答はどうやら青年会のサクラが行なったようである。問答の内容はミンブチャーの歌の意味、翁に

写真４：ミンブチャーを舞う翁

歯が一本しかない訳、後生に行く時の五ヶ条などであった。青年会の方の話では、最近の人たちは恥ずかしがってあまり質問をしてくれない。だからサクラを入れているということである。本来は八重山方言と裏声さえ使えば、誰がどんな質問をしても構わないそうだ。また、質問をする時にタオルか手拭いで顔を覆っていた理由も聞いたところ、アンガマたちはあの世から来た人達である。彼らに顔を覚えられてしまうと、アンガマが帰る時に一緒に連れて行かれてしまうからだと教えてくれた。

18時55分、観客に紛れたサクラが翁に六調節をせがんだ。この六調節が終わりを告げるのである。軽快な三線と歌声にのって、翁と媼が踊る。途中、掛け詞を述べた後しばらく踊ると、家の人たちも巻き込んで共に乱舞して終わった。その後は道行き歌を歌いながら次の家に向うのである。以上がアンガマの一連の流れである。細部を除けば他の青年会も同じである。盆行事とは思えないくらい、華やかさと娯楽性が強く感じられた。

20時２分に次の石垣青年会のアンガマが始まった。この頃になると辺りも暗くなっていた。ホテルの庭という事もあってか、見物人は大勢いた。石垣青年会のアンガマには道行

き歌がなく、三線の旋律だけである。また、焼香の時に翁と媼が線香を持って踊る。節歌に合わせる踊りの振り付けは、各青年会によって変わるようであった。また、終わりを告げる六調節は、せがむのではなくファーマーの演奏によって合図なしに始められ、掛け詞はなかった。この後３軒を訪れたのだが、夜遅くなればなる程に観客は増え、野次も増えた。野次がとぶ度に笑いが起きた。この日の最後の家が終わったのは24時15分だった。

11日

この日の昼は前日までとは違い町が静かに感じられた。表通りでも人の通りは少なく、それまでは気付かなかった野良犬が通りを歩いているのが目に付く。19時30分、夕立で30分遅れた登野城のアンガマが始まった。この家は初盆の家であったが、霊前口上でこの家の者はしっかりしているから安心して後生から見守ってくださいというようなことを言ったくらいで、特に他の家との違いはなかった。登野城のアンガマはこの日、全ての家を歩いて訪れ、最後である４軒目の家が終わったのは24時13分だった。

12日

大川青年会も他のアンガマと大まかには同じであった。道行き歌はあったが、登野城青年会とは歌詞が違っていた。また、焼香では翁だけが踊り、六調節は石垣青年会と同じく演奏を合図に始められた。終わる頃に日が暮れだしていたが、まだ見物人は少なかった。そこから登野城青年会の最終の２軒に行った。40人はゆうに越える見物人で囲まれ、３日間での最高潮の熱気に包まれていた。芸能としても、アンガマの演じ手側と見物人、そして行なわれている場、その３つが見事に一体となっていた。全て終了したのは24時15分であった。

このソーロン・アンガマは問答と踊りが大半を占める。問答で出ていた質問は仏壇の飾り棚の数と意味や、線香の数と意味、死後に後生へ行くにはどうするか、などの盆に関することの質問が多かった。勿論、大半はサクラの質問であるが、これらはお決まりの質問のようだ。だが、それらを翁と媼は即興性を持たせつつ説いてゆくのである。盆行事なのに非常に明るく感じられた。以上がソーロンのアンガマであるが、もう１つアンガマと呼ばれているものを紹介する。

ソーロンの過ぎた次の日、つまり13日に同じ石垣島の宮良という地域でアンガマが行なわれた。それは四ッ字のものとは違い、仮面を付けた翁と媼はおらず、仮装もない。30人くらいの男女が浴衣に紅白の鉢巻姿で各々の家を訪れ、食事をしては談笑し、節唄に合わせて踊るということを繰り返す。問答もない。道行きは三線の旋律だけで、節唄を歌ってからの始まりの挨拶以降は、共に食べて呑み、踊るのである。しかし、これが非常に穏やかで明るいのである。

この宮良のアンガマは各家々を訪れた後、御嶽に奉納される。ソーロンの三日間で見たものとは違うアンガマである。この違いがどのような理由からであるのかは明確ではないので、これは今後の課題の一つとしたい。ただし、四ッ字と宮良を比較すると、その共通点として先祖や人々と共に楽しみ、過ごすという事が見えてきた。今回の調査は当初、アンガマの問答に興味をもって見に行ったのだが、実際にアンガマを目の当たりにしてみる

と、問答の内容よりも儀礼の在り方に関心が向いた。そして、石垣四ッ字と宮良の両方から、盆ということで儀礼も仏教の影響が強いが、その根底には共同体で生活する人々と共食し、共に楽しむことで、先祖や神も交えての一体感を共有する事が中核としてあるのではないかと感じられた。

以上、現地に入り、対象を目の当たりにする事の重要性を改めて感じた事を添え、調査メモの中から儀礼以外の背景的部分も織り交ぜるかたちにして、アンガマ報告とさせていただきたい。

参照文献

波照間永吉　1999 『南島祭祀歌謡の研究』
砂小屋書房